

Title	民族学考古学専攻設立二十五周年：記念事業と講演録
Sub Title	The twenty fifth anniversary of the Department of archaeology and ethnology, faculty of letters
Author	阿部, 祥人(Abe, Yoshito)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.4 (2005. 4) ,p.97(419)- 101(423)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050400-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民族学考古学専攻設立二十五周年

—記念事業と講演録—

民族学考古学専攻は一九七九（昭和五五）年春に設立

され、同時にその第一期生を迎えた。その時からぞえ、今年がちょうど四半世紀の節目となる。この間、一学年に二〇名から四〇名くらいの規模で学生が入ってきたため、既に千名に近い人材を世に送つてきたことになる。そして、その中には、多くの研究者たちも育つている。

この度、民族学考古学専攻では、これを記念して卒業生・関係者による論文集を企画、発行した。専攻設立とその後の研究室運営に多大な貢献をされてきた、小川英雄・近森正・鈴木公雄の三名の名誉教授への感謝をこめたものである。⁽¹⁾以下に示した著者とタイトルに見られるように、世界中で活躍している研究者の実に多岐にわたり力作が、五〇編以上も寄せられた。この論集の書名に「时空をこえた対話——三田の考古学——」を選んだ所以

でもある。

そして、本書を先生方へ贈呈し、記念の会⁽³⁾を催した日には、三先生によるそれぞれの研究を振り返る貴重なご講演を頂くことが出来た。三名の先生方は共に、三田史学会にも大きく貢献され、当「史学」誌上にも数多くの研究を発表されておられる。そうした深い縁もあることから、当日の講演内容をまとめられた原稿を、それぞれに頂きここに載録させていただく次第である。

なお、ご講演当日二〇〇四年五月八日、四谷の病室から直接会場に足を運び、力の限りの講演をされた鈴木公雄先生は、同年十月二十二日、講演後に戻られたのと同じ病室から天堂に旅立たれた。したがつて、ここにある文章は、鈴木公雄先生のまさに絶筆であることを痛恨の思いで申し添える。

（阿部祥人記）

註

(1) 当専攻の設立に関する経緯や三名の名誉教授のご功績については、塾の機関誌「三田評論」二〇〇四年十月号に詳しい紹介をしてあるので省略する。

(2) 本書の刊行費用の一部には、三田史学会七〇周年記念事業の助成金があてられた。また、その巻末の「民族学考古学専攻コース・専攻開設後に提出された修士論文の著者一覧」に次の方々の遗漏があつたため、追加・訂正する。七九年針谷浩一、八〇年松本健、中山清隆。

(3) 当日「記念の会」で紹介した赤澤威氏の肩書きは次のように訂正する。

「東京大学名誉教授」→「国際日本文化研究センター名誉教授」

1	高山 博	更新世人類の「珊瑚の道」——南西諸島での更新世人類化石									
2	羽生 淳子	狩猟採集民文化の長期的変化と地域的多様性——『フォーレジングとコレクティングをこえて』所収の論考を中心として									
3	山口 徹	住みよい環礁州島の条件——マーシャル諸島のマジュロ環礁先史居住									
4	名島 弥生	琉球列島におけるサンゴ礁環境利用研究——漁撈活動復元研究を通して									
5	阿部 祥人	人と貝岩——二つの遺跡の検討から									
6	渡辺 文彦	東北地方日本海沿岸における石器石材の利用——東山系石刀石器群の分析									
7	米倉 薫	旧石器製作過程におけるブランク形状と石材消費効率についての試論——目的剥片形状との関連を通して									
8	古田 幹	礫群と集石のあいだ——埼玉県朝霞市泉水山・富士谷遺跡の資料より									
9	藤山 龍造	石器研究の視角——利器としての剥片									
10	山岸 良二	九十九里浜旧椿海周辺の縄文丸木舟									

慶應義塾大学民族学考古学専攻設立二十五周年記念論集
「時空をこえた対話——三田の考古学——」著者とタイトル
巻頭のことば

- 小川英雄 ローマ帝国のオリエント宗教と考古学
近森 正 サンゴ礁の原始
鈴木公雄 民族学考古学専攻の二十五年

11	佐野 隆	縄文時代中期の住居内配石について (再論)	24	比毛 君男	中世瓦質土器と瓦についての小考— 中世後期の茨城県内の事例から
12	合田 恵美子	加曽利E4式土器における文様施文 方法の変化に関する試論	25	森本 伊知郎	近世陶磁器における陶工の個人差— 瀬戸磁器端反碗を中心に
13	稻村 晃嗣	千葉県鰐ヶ山貝塚出土の縄文時代後 期初頭土器について	26	石神 裕之	近世庚申塔の形態に対する多变量解 析—東京近郊におけるB-1b類を事 例として
14	大内 千年	環状貝塚に関する一視点—流山市三 輪野山貝塚の事例から	27	須田 英一	上宮田陣屋の考古的研究に関する素 描—三浦市大芝原遺跡・海防陣屋関 連土壘をめぐる調査研究の現状
15	稻野 裕介	岩版と岩偶の「岩」の用字について	28	神野 信	砥石のある風景—ラオス北部に見る 砥石の場所
16	稻野 彰子	岩版の周辺	29	藤原 達也	ガンダーラ北部域の仏教岩彫り群に ついて—現地考古調査に基づく考察 bit hilaniとピート・ヒラニ型式
17	藤村 東男	出土点数から見た土偶祭祀—西日本 の場合	30	高田 学	イスラエル国エン・ゲヴ遺跡から出 土したペルシア時代からヘレニズム 時代の土器—遺物データベースに もとづいて
18	小林 圭一	遮光器土偶前額部の「ノ字文」につ いて	31	牧野 久実	Clactonian インダストリーとは何 か—近年の Clactonian 論争を振り返 り—南関東の事例から
19	渡辺 誠	ビッチ付着の編物用石錐			
20	岡本 孝之	埼玉県の弥生系石劍			
21	安藤 広道	装飾須恵器小像群の世界			
22	大西 雅也	羨門部に石積施設をもつ横穴墓につ いて—南関東の事例から			
23	沼山 源喜治	陸奥国鎮守府胆沢城周辺の古代寺院 の成立と展開			

る

33	桜井 準也	遺物の創造力—伝説の生成に關わる 遺物・遺構	44	滝波 章弘	オートル・ボワイヤージュ誌のフラ ンス人旅行文—差異と周縁の意識を つくるもの			
34	高杉 博章	神仏を祀る古代津軽のムラ	35	川崎 史人	トカラ列島平島の盆行事—20年のと きを越えて	45	井関 瞳美	「年を束ねる儀礼」—先スペイン期 メシーカ人による伝統の解釈と再生 産
36	藤 淳一	殷後期から西周時代前期の金文をめ ぐつて	37	森 雅子	神女列伝—中国古代の地母神の残像 社会主義体制の崩壊と脅かされる年 長者の権威—モンゴル国遊牧社会に おける陰曆一日の月をみることを事 例に	46	小林 謙一	AMS ¹⁴ C年代測定と曆年較正を利 用した繩紋中期の土器型式変化の時 間
38	辛島 博善	インド起源の中国説話	39	高山 純	象理解への一試論	47	奈良 貴史	古組織学(Paleohistology)の考古 学的研究への応用
40	杉本 智俊	古代レヴァントにおける雄牛像—表 象理解への一試論	41	小板橋 又久	旧約聖書に見られる楽器の音	48	鵜沢 和広	骨資料の特性と埋蔵の法則—動物考 古学におけるタフオノミー研究の導 入
42	徳永 里砂	古代アラビアの砂漠の神々—ビィ ル・ヒマー地域の岩壁碑文研究から	43	永井 正勝	新エジプト語の出現と文字言語の分 化	49	姉崎 智子	動物考古学における年齢査定方法の トリック—イノシシ類を題材に 「シカ送り」儀礼と二つの時間
50	佐藤 孝雄	「モノ」から「バケモノ」「ツクリモ ノ」—近世日本における器物認識 の物質文化研究試論	51	朽木 量	近現代考古学認識論—遺跡概念と他	52	五十嵐 彰	

著表象

53 杉本 豪
考古学マネージメントとサービスの循環——イギリス考古学のイヴェント風景から

54 法橋 量

車田・車刈り再考——ドイツにおける農耕習俗と習俗研究パラダイムの転換

55 大石 徹
モニユメント研究の動向——人類学を中心

56 棚橋 訓
モノとしての復権——ビーグルホール夫妻の『プカプカ民族誌』をめぐる
覚書